

「CIAから岸への資金提供を示す文書をこの目で見ています」

と証言しています。一回二〇万〜三〇万ドル「現在の貨幣価値で一〇億円くらい」の金額が何度も提供されていたというのです（『週刊文春』二〇〇七年一〇月四日号）。

そうした巨額なCIAマネーによって一党支配を確立した自民党のもと、日本はその後、世界の歴史でもまれに見るほどの高度経済成長を達成したわけですから。

それが必然だったのか偶然だったのか、私にはよくわかりませんが、CIAが自民党を全面的にバックアップしていた一〇年間（一九五八〜六八年）というのは、日本の高度成長の最盛期とほぼ正確に重なっているのです。

その一方、毎年自民党に流れこんだ数百億円ものCIAマネーは、選挙の票や政策を金で売り買ひする「構造汚職」の風潮を、日本の政界に蔓延させることになりました。そのとき生まれた明らかに違法な国会議員たちの金権汚職体質は、一九九五年以降、年間約三〇〇億円も国費を政党交付金として、「構造汚職」の代わりに政界へ分配するようになるまで、つづくことになったのです。

ティム・ワイナーが描く「自民党結党までの経緯」

それでは、まだアメリカ国務省が公開していない秘密計画の部分も含めて、岸とCIAのきわめて密接な関係を、ワイナー氏の『CIA秘録』（翻訳：藤田博司・山田侑平・佐藤信行 文藝春秋）を中心にごく簡単にまとめておきましょう（以下125ページまで、注のないものはすべて同書からの引用）。

ワイナー氏は同書の「まえがき」のなかで、この本を書くにあたっては、
〈10人の元長官を含むCIA職員、元職員への300回以上のインタビュー〉
を行ったと書いています。そして同書は、

〈すべて実名の情報にもとづいており、匿名の情報源も、出所をふせた引用も、伝聞も含まれていない。すべて直接取材と一次資料にもとづく、はじめてのCIAの歴史である〉と強調しています。

岸とCIAについての歴史的な関係は、さきほどご紹介したアメリカ国務省歴史課の二〇〇六年の『編集後記』と、このワイナー氏の著作や発言を組み合わせれば、ほぼ正確な歴史が再現できるのです。

☆

☆

「CIAは一九四八年以降、外国の政治家を金で買収し続けていた。しかし世界の有力

『知ってはいけない2』(矢部宏治:講談社現代新書)

国で、将来の指導者「岸首相」をCIAが選んだ最初の国は日本だった」

「岸信介は「第2次大戦が終わったあと」(略) A級戦犯容疑者として巣鴨拘置所に三年の間収監されていた。

東条英機ら死刑判決をうけた7名のA級戦犯の刑が執行されたその翌日(『1948年12月24日』、岸は(略)釈放される。

釈放後岸は、CIAの援助とともに、支配政党(『自民党』)のトップに座り、日本の首相の座までのぼりつめるのである」

「(釈放後)七年間の「CIAによる」辛抱強い計画が、岸を戦犯容疑者から首相へと変身させた。岸は『ニューズウィーク』誌の東京支局長から英語のレッスンを受け、同誌外信部長のハリー・カーンを通してアメリカの政治家に知己を得ることになる。カーンはアレン・ダレス(『ジョン・F・ダレス』)の弟で、1953〜61年までCIA長官の親友で、後に東京におけるCIAの仲介役を務めた。岸はアメリカ大使館当局者との関係を珍種のランを育てるように大事に育んだ」

「岸は一九五〇年代(一九五四年)に、東京のアメリカ大使館の働きかけで「その」傘下に納まり、自民党総裁になったのちに、アメリカの信頼できる協力者となった(当時

アメリカ大使館の首席公使だった、グラハム・パーソンズの証言)」

「岸は日本の外交政策をアメリカの望むものに変えていくことを約束した。アメリカは日本に軍事基地を維持し、日本にとっては微妙な問題である核兵器も日本国内に配備したいと考えていた。岸が見返りに求めたのは、アメリカからの政治的支援だった」

「ダレス国務長官は1955年8月(『自民党結党の3カ月前』)に「重光葵外務大臣に同行して訪米した」岸と会い、面と向かって「もし日本の保守派が一致して共産主義者とのアメリカの戦いを助けるならば——支援を期待してもよろしい、と言った。そのアメリカの支援が何であるか(『財政支援だということ』)は、だれもが理解していた」

「岸はアメリカに自分を売り込んで、こう言った。「もし私を支援してくれたら、この政党(『自民党』)をつくり、アメリカの外交政策を支援します。経済的に支援してもらえれば、政治的に支援しますし、安保条約にも合意します」

「CIAと自民党の間で行われた最も重要なやりとりは、情報と金の交換だった。金は党を支援し、内部の情報提供者を雇うのに使われた。アメリカ側は、三十年後に国会議員や閣僚、長老政治家になる、将来性のある若者との間に金銭による関係を確立した。(略)外国の政治家を金で操ることにかけては、CIAは七年前にイタリアで手がけて

いたとき「1948年のイタリア総選挙」より上手になつて来た。現金が詰まったス
ーツケースを高級ホテルで手渡すというやり方ではなく、信用できるアメリカのビジネ
スマン（「経済人」）を仲介役に使って協力相手の利益になるような形で金を届けてい
た。こうした仲介役のなかに、ロッキード社の役員がいた」

「一九五五年十一月、「自由民主党」の旗の下に日本の保守勢力（「反共産主義勢力」）
は統合された。岸は保守合同後、「初代の」幹事長に就任する党の有力者だったが、議
会のなかに、岸に協力する議員を増やす工作をCIAが始めるのを黙認することにな
る。巧みにトップに上り詰めるなかで、岸は、CIAと二人三脚で、アメリカと日本と
の間に新たな安全保障条約をつくりあげていこうとするのである」

* 『天皇とアメリカ』（吉見俊哉、テッサ・モーリス・スズキ 集英社）からの要約。モーリス・スズキ（オーストラリ
ア国立大学教授）がジョージタウン大学のパーソンズ・アーカイブで発見した、グラハム・パーソンズ自身の「自
伝の草稿」と「手紙」に書かれていた内容。「傘下に納まる」の原文は“catharated”
* * 映画「ANPO」（リンダ・ホーグラント監督、2010年）中のティム・ワイナーの発言。岸自身の回想録にも
ある通り、この1955年の訪米時には、雑誌「ニューズウィーク」（CIA協力者が多数在籍）になぜか岸が
「近い将来首相になる人物」として取り上げられています。パーソンズの証言他と合わせると、すでにこの時点で
岸を首相にするシナリオができていて、アメリカ側が重光を意図的に冷遇した可能性が高いものと思われれます

岸は永続的な財源による支援を希望した

そして岸とCIAの物語は、ようやく108ページの写真にたどりつくのです。

「一九五七年六月、囚人服を脱ぎ捨ててからわずか八年後に、岸は「首相としての」ア
メリカ訪問を実現させた。ヤンキー・スタジアムで始球式のボールを投げ、アメリカ大
統領とともに白人専用のカントリー・クラブでゴルフをした。ニクソン副大統領は上院
で、岸をアメリカの偉大で忠実な友人と紹介した」

「岸は、かのマッカーサー將軍の甥に当たる新駐日大使、ダグラス・マッカーサー二世
に、もしアメリカが岸の権力固めを支持してくれるなら、新安保条約を通過させ、左翼
勢力の台頭も抑え込め、と語った。岸はCIAから内々で一連の支払いを受けるよ
り、永続的な財源による支援を希望した」

岸がアメリカから評価された理由

ではその岸が、アメリカ政府から評価された最大のポイントはどこだったのか。

もつとも大きな理由は、当時アイゼンハワー政権が進めていた、核兵器を中心とする
世界規模での安全保障政策「ニュールック戦略」^{（ストゥラツ）}にありました。